

論文

メディア（情報）・リテラシーと司書教諭課程の一考察

永井 悦重*

キーワード：メディア・リテラシー，司書教諭課程，調べ学習・探究学習

1. 司書教諭課程とは はじめにかえて

司書教諭課程は、学校図書館法5条に位置づけられた司書教諭を養成するための「学校図書館 司書教諭講習規定」で定められた5科目10単位（「学校経営と学校図書館」「学校図書館メディアの構成」「学習指導と学校図書館」「読書と豊かな人間性」「情報メディアの活用」各2単位）によって構成されている。司書教諭資格を得るためには、教職課程を履修し、教職免許状の習得が前提になっている。

本学では、2011年4月から司書教諭課程が開設され、筆者は2011年4月から5科目のうち3科目（2014年からは4科目）を担当している。司書教諭資格が教職課程＋司書教諭課程で成り立っていることから分かるように、教育学と図書館情報学の重なり合う部分に位置するという特徴を持っている。

2014年6月の学校図書館法の一部改正によって（施行は2015年4月から）、新たに学校司書が学校図書館法上に明記されたこともあり、司書教諭と学校司書の協働が大きな課題となっている。学校司書は学校図書館に常駐する資料と資料提供の専門家であり、学校司書の働きによって機能する学校図書館を授業に生かすのが司書教諭である。

2. なぜ 司書教諭課程でメディア・リテラシー か

筆者は、司書教諭養成科目である「学習指導と学校図書館」の中で、メディア・リテラシーを重要なファクターと考え、以下のような授業計画を立てている。この「学習指導と学校図書館」の眼目は、教育活動の中にかに学校図書館の機能を活用し、豊かな授業を創造するかにある。

(1) 「学習指導と学校図書館」 講義要項（本校2014年度）

① 学校図書館の機能とその役割

- ・資料提供
- ・「教育課程の展開に寄与する」
- ・知的好奇心を触発し、資料要求を引き出す

* 山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

- ② 学習におけるメディアの活用の意義
 - ・メディアの種類と特徴
 - ・資料活用と授業方法の転換
- ③ 学校図書館を活用する授業 I 小学校
- ④ 学校図書館を活用する授業 II 中学校・高等学校
- ⑤ 学校図書館を活用した授業の見学
- ⑥ 「学校図書館を活用した授業」の意義
 - ・図書館を活用した授業を必要とする学習方法と教育観
 - ・調べ学習（探究学習）の方法
 - ・塩谷京子氏の情報教育と鳥山孟郎氏の世界史の授業
- ⑦ 調べ学習と図書館サービスの実際 I
 - ・レファレンスサービスと図書館ネットワーク
 - ・学校図書館のコレクション形成（メディアの構成）
 - ・資料・情報収集、検索援助
- ⑧ 調べ学習と図書館サービスの実際 II ブックトーク
 - ・テーマと資料と子どもを繋ぐ
 - ・多様な切り口と視点を提供する
- ⑨ 学校図書館とメディア・リテラシー I
 - ・メディアとは、メディア・リテラシーとは
 - ・メディアが伝える情報
 - ・活字資料、新聞・テレビ、インターネット
- ⑩ 学校図書館とメディア・リテラシー II
 - ・子どもたちに求められているのは
 - ・メディア・リテラシーと学校図書館
- ⑪ 教科書を読み、学校図書館を活用した授業案を作成する
 - ・教科書概観
 - ・学習指導案を読む
 - ・学校図書館の機能を活用した授業案の作成
- ⑫ 図書館利用教育 I
 - ・図書館オリエンテーション
 - ・調べ学習のガイダンス
- ⑬ 図書館利用教育 II
 - ・利用教育体系表
- ⑭ 司書教諭と学校司書の協働

（2）調べ学習（探究学習）とメディア・リテラシー

〈調べ学習・探究学習と教育観〉

近代以降の日本では、真理追求のプロセスより、テストで「正解」を出すという「結果」に重点をおいた教育が主流を占めてきた。それに対して、「調べ学習」「探究学習」は、真理追求のプロセスに力点を置いた学習方法である。

「調べ学習」「探究学習」が成立するには、調べるに足りる多様で豊かな資料群と機能する学校図書館が不可欠である。同時に、調べるプロセス — どうテーマを設定し、適切な資料・情報を収集し、それを読み解き・比較・分析し、まとめるのか — が問われる必要がある。また併せて、「もっと知りたい」「どうしてそうなっているのだろう」と思う児童・生徒の問いや興味・関心をいかにして触発するかが今日的な課題である。

近年、都留文科大学の佐藤隆が「人間存在の根幹に関わる『問い』にていねいに耳を傾け、子どもの『問い』と響きあう以外に教育実践を構想することは不可能だということ次第に明らかになりつつある」と著書の中で述べている（注1）。これは、20世紀末に佐藤学、尾木直樹らの教育研究者が、子どもの危機的状況を踏まえ、この危機を乗り越えるためには、「教え」から「学び」への転換が急がれることを提言した（注2）ことに連なる指摘である。

現行（2008年改訂）の学習指導要領に見られる「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、」云々という文言が登場したのは、1998年公示の小・中学校学習指導要領からで（高校は1999年）ある。文部省による学校図書館充実施策が開始されたのも、ほぼ同時期であり、「総合的な学習の時間」（以下、「総合」と略す）の創設と共に、学校図書館を活用した調べ学習・課題解決学習がクローズアップされることになる。

〈調べ学習の課題〉

調べ学習が広がる中で、当時の教育雑誌をひも解くと、調べ学習は丸写しで終わってしまいがち。意味がないからもうやめた。などといった教師の感想・意見も見受けられる。しかしながらその一方で、様々な資料や情報を批判的に読み解き、丸写しではなく要約する力を子どもたちにつけることを柱にして、調べ学習を展開した教師たちもいる（注3）。

調べて分かることの意味や調べ学習のプロセス等も併せて問われることになったのである。すなわち、様々なメディアの特徴を知り、それらが発信する情報を批判的に読み解くこと抜きにした調べ学習・探究学習は考えられないということが明らかになったと言える。

3. メディアとメディア・リテラシー

2008年に教育評論家尾木直樹氏が実施したアンケート調査（注4）によると、中学生の約7割、高校生の約6割が小学生のうちにケータイやパソコンでインターネットを使い始め、中学生の2人に1人、高校生の約8割が自分のケータイを持っているという結果がでている。2015年現在では、その状況は加速していることが容易に想像できる。

このようなネット社会の今、子どもたちに、様々なメディアが発する情報を批判的に読み解き、活用する力をどう付けていくのか、21世紀の世界的な課題である。様々なメディアが収集され、機能する学校図書館が果たすべき役割は大きい。

（1）メディアとはなにか

マスメディアの報道や日常会話の中では、テレビや新聞等を「メディア」と言い表すことが多いが、正確にいうと、「メディアとは、情報を伝える媒体の総称」である。

メディアの中身は、図書、新聞、雑誌等の活字資料からビデオ、DVD、テレビ、映画、電子資料等の非活字資料まで、幅広く多様である。ちなみに、街頭で配布されるチラシの類もメディアである。

(2) メディア・リテラシーの定義

メディア・リテラシーの定義として、日本における「メディア・リテラシー」の先駆者ともいべき鈴木みどり氏と、岩波新書（赤版）で広く読まれている菅谷明子氏2人の定義を以下紹介する。

○「メディア・リテラシーとは、市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創りだす力を指す。また、そのような力の獲得をめざす取り組みもメディア・リテラシーという。」

（『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』鈴木みどり著 世界思想社 1997年）

○「メディア・リテラシーとは、ひと言で言えば、メディアが形作る「現実」を批判的（クリティカル）に読み取るとともに、メディアを使って表現していく能力のことである。」

（『メディア・リテラシー』菅谷明子著 岩波書店 2000年）

今まで、日本では、メディア・リテラシーと情報リテラシーという二つの言葉が使われてきたが、近年では二者を統合した「メディア情報リテラシー」という文言が登場した。法政大学の坂本旬によると、「メディア情報リテラシーとは、さまざまなリテラシーを統合したユネスコの新しいリテラシー概念であるが、基本的にはメディア・リテラシーと情報リテラシーを土台にしている。」（注5）

4. メディアが伝える情報をどうみるか

メディアを 1.図書、2.新聞・テレビ、3.インターネットに大別し、それらが伝える情報をどうみるか、以下、検討する。

(1) 図書を中心とした活字資料

ここで取り上げるのは、図書と言っても、歴史的な資料である。中学校社会科 歴史分野の授業の中で、成蹊中学・高校教諭 日高智彦が資料をどう活用した授業を展開したか見てみよう。

現行教科書の記述では、「鉄砲伝来」は以下のように記されている。

○「鉄砲は、長篠の戦いより30年ほど前、種子島（鹿児島県）に流れ着いた、中国船に乗っていたポルトガル人によって伝えられました。」（『日本の歩み 小学校の社会 6 上』日本文教出版 平成23年）

○「1543年、種子島（鹿児島県）に漂着した倭寇の船に乗っていたポルトガル人によって日本に鉄砲が伝わりました。」（『社会科 中学生の歴史』帝国書院 平成24年）

以下の文章は、鳥山孟郎・松本通孝 編『歴史的思考力を伸ばす授業』青木書店 2012年の第1章に掲載されている、日高の実践を永井の視点で要約したものである。

日高智彦氏の社会科授業は、生徒への問いかけから始まる。

〈教師の生徒への問いかけ〉

問1「種子島に漂着して鉄砲を伝えたポルトガル人はどこの船に乗っていたらろう」

a ポルトガル船 b スペイン船 c 日本船 d 中国船

問2「鉄砲を種子島に伝えたポルトガル人が乗っていた中国船は、どのような船だったか」

a 明の使節を乗せた船 b 明の水軍の船 c 明の民間商人の船 d 明への朝貢船

問3「約2000人の集団であったと伝えられている王直の率いる倭寇は、どのような人々

から成り立っていたか」

A 日本人 b 中国人 c 朝鮮人 d シヤム人

問4「ポルトガル人は、アジアでどのような商品を探していたのだろうか」

A 香辛料 b 銀 c 生糸 d 陶磁器

「なぜポルトガル人は倭寇の船に乗っていたのだろうか」・・・と中学生に重ねて問いかけていく。

〈設問の提示と解説〉

日高の授業は、生徒に設問を提示して考えさせ、その答えを解説していく形の授業である。「答えの解説にあたって、その根拠（資料）を示すことを重視した」と、彼は述べている。

〈資料批判〉

通説の根拠は、南浦文之の『鉄炮記』（1606年）にある。種子島領主が祖父の功績を顕彰するために作らせたものであり、資料的価値が高いとは言えない。しかも、この書には。種子島に漂着した船は「どこの国から来たのかわからず」とある。アントニオ・ガルバンの『諸国発見記』（1563年）には、「1542年に3人のポルトガル人がジャンク船に乗ってシヤム（タイ）からリャンポー（寧波対岸の六横島）に向かう途中、北緯32度の島に着いた」とある。

歴史的な事象では、誰が、いつ、どんな立場で書いた情報かが重要な意味を持つということも誰もが納得するが、「今」のことになるとどうしてこれほど無批判なのだろうか。そのことをしっかり考えていかねばならない。

（2）新聞・テレビ

2014年総選挙に関連して、メディア文化論の田中東子が全国紙の報道と分析を論評した記事が毎日新聞に載った（注6）。また、東日本大震災報道や朝日新聞吉田証言報道等、マスメディアの報道をめぐって多くの新聞や雑誌が特集を組んだ。マスメディアの報道は常に検証される必要がある。

〈松本サリン事件報道〉をめぐって

2014年1月、オウム裁判が行われ、テレビや新聞などで特集が組まれた。オウム真理教が起こした暴虐極まりない一連の事件を風化させてはならないが、中でも、「松本サリン事件」はメディア(情報)・リテラシーを考える上で忘れてはならない事件である。

「松本サリン事件」は、1994年6月27日、オウム真理教が長野県松本市で猛毒サリンを散布し、多くの人々の生命と健康を奪った事件であるが、被害者である河野義行さんが犯人であるかのような、一方的なマスコミ報道が1年近くに渡ってなされた。

なぜこのような事実無根の誤った報道がTV、新聞、雑誌等でなされたのか。警察発表を鵜呑みにして裏を取らずに報道されたこの事件は、「事件報道のあり方」や「報道と人権」等の問題について、情報の送り手と情報の受け手である市民両者に鋭く問いかけた。しかしながら、報道のあり方は改善されず、事件そのものが風化の危機にさらされているのが現状である。

DVD「テレビは何を伝えたか」に収められているメインの映像「テレビは何を伝えたかー松本サリン事件のテレビ報道から」は、長野県松本美須ヶ丘高校放送部が1997年9月

制作し、第 20 回東京ビデオフェスティバルでグランプリを受賞した力作である。ほかに映像 2 作品とリーフレットを付して、「松本サリン事件をテーマとしたメディア・リテラシー教材」作成したのは、長野県メディア・リテラシー研究会である。

この作品は完成度が高く、メディア・リテラシー教材として現在も活躍している。

事件から 10 年後の 2004 年に出された『報道は何を学んだのか』（河野義行ほか 著 岩波ブックレット）には、「ニュースにとって何が大事なのかといえば、『早さよりも正確さ』だと思う」（当時、「報道ステーション」スタッフ 磯貝陽悟氏）「主流とは別の視点を探ること」（当時、市民メディアアドバイザー 下村健一氏）等、真摯な意見交換が掲載されている。DVD と併せての視聴を薦めたい。

（3）インターネット

多くの大人や子どもたちが日常的に家庭でネットを使っており、ケータイ・ネット依存症の子どもたちも少なくないのが現状である。

そんな中で、かつては、調べるといえば「本で」だったが、今では「ネットで」が普通になっている。しかし、ネットで調べられることと調べられないことがあることを知らねばならない。

〈インターネットで調べてみよう〉

問題

1. 新撰組に農民出身者が多いというのは本当か
2. どの自治体にどれだけ学校司書が配置されているのか

調べた結果

- 1.
- 2.

調べた結果はどうだったろうか。まずは 2 問目についてであるが、ネット上でいくら検索しても答えは出てこない。文部科学省がホームページ上にアップしている「学校図書館の現状に関する調査」結果を見れば、全国の小・中・高等学校に何人の司書教諭、学校司書がいるかトータル数は出てくるが、自治体ごとの数は出てこない。1 問目については、関連情報は出てくるだろうが、新撰組隊員のうち何人が農民か、典拠を明らかにした情報は出てこない。

もちろん、インターネットにもメリットはある。信頼できる確かな情報を発信しているサイトやホームページもあり、東日本大震災などでは大きな役割を果たした。誰が何を典拠にして書いたものかを確認、対立する見解や活字資料による情報も目配りして、ネット情報は使うべきである。

今、未曾有の東日本大震災以降、マスメディアの震災・原発事故報道の検証が、行われつつある。

今後、日本や世界で進行しつつある様々な問題の中で、メディア・リテラシーについての検証と、もっと踏み込んだ論議が必要になってくるだろう。

5. 今、子どもたちに求められているのは

メディア・リテラシーの観点から、今の子どもたちに必要なことは何かと考えた時、

下記の5点にまとめることができるのではないか。

(1) 情報にアクセスできる、読み取る

まずは、様々なメディアが発する情報にアクセスすることができるということである。誤解のないように言うておくが、これは、「コンピュータが操作できる」という意味にとどまらない。本や新聞などの活字資料から電子資料まで、様々なメディアが発する情報を読み解くことができるという意味である。

(2) 様々なメディアの特徴を知る

活字資料から電子資料まで、多様なメディアの特徴は何かを知り、互いに補完して使うことができる力をつける。

(3) 情報を比較し分析する 裏をとる

様々なメディアが発する情報を比較し、分析する。さらに、裏をとり検証するという姿勢とスキルを身に付ける。

(4) 他人との情報交換、相互批判、論議

一人で調べ、レポートにまとめるというのでは、ともすれば独善的になりがちである。可能ならば、最終的なまとめをする前の段階で、クラスや小グループで発表し、質疑討論を行うことを考えてみてはどうだろうか。意見交換の中で触発され、発見することも多いからである。それでこそ、調べ学習が深まるというものである。

(5) 想像力、視野の広さ(別の視点)を培う

様々なメディアが発する情報を収集し、比較検討を加えて、考察する。他人からの質問に耳を傾け、意見交換し、アドバイスも受ける。このようなプロセスを経る中で、視野を広げたり、「別の視点」に気づいたりする。

(6) 情報を加工・発信する

調べて得た確かな情報をもとに、それをレポート、論文、新聞、パワーポイントなどに加工し、発信する。

要約方法や引用のルール、参考文献の明記など、レポート作成や各種機器の活用法も習得する必要がある。

6. 学校図書館の役割

上記した「今、子どもたちに求められている」力をつけるためには、学校図書館活動の総点検が必要になってくる。

その点について、以下に述べる。

(1) 多様なメディアの利活用

学校図書館には、図書、本、雑誌、新聞、視聴覚資料、インターネット等 幅広いメディアが収集され活用されなければならない。各メディアの特徴を利用者が知り、活用できているだろうか。

（２）問われる図書館の姿勢

機能する学校図書館が最も大切にしているのは、求められた資料は「草の根を分けても探し出し、提供する」という姿勢である。リクエストやレファレンスなど、利用者の求めに応えるために、他校・公共図書館等との連携も含めて、その姿勢が貫かれているだろうか。

また、多様で豊かな図書館コレクションが形成できているだろうか。少なくとも、公立の義務教育諸学校においては文部省の「学校図書館図書標準」に達するために必要な予算を確保し、高校については、全国S L Aの「学校図書館メディア基準」等を参考にするなど、充実したコレクション形成が求められている。

（３）資料提供の充実

「資料提供を通して知る自由を保障する」という姿勢が図書館の根幹をなしている。

対立する意見のある問題については、それぞれの観点に立つ資料を幅広く収集し、提供することができているだろうか。また、様々なテーマでの工夫を凝らした展示や、きめ細かいフロアワーク、広報活動などを通して、子どもたちの知的好奇心を触発し、「別の視点」を提起する働きかけが図書館活動の中で日常的に行われているだろうか。ブックトークや作家展、その他、本のおもしろさをアピールする様々な取り組みやサービスが小学校だけでなく、中・高校でも日常的に行われているだろうか。

トータルな意味での資料提供の見直しと、充実が求められている。

7. 学校教育の中に位置付ける

（１）調べ学習の改善・充実

知的好奇心を触発し、視野を広げ、課題を深める調べ学習の組み立てや「調べて分かること」の意味を学校教職員集団の中で徹底・追求、検証することができているか。

（２）学校図書館利用教育の充実

従来の図書館オリエンテーションの見直しが必要である。また、調べ学習の事前ガイダンスやレポート指導のステップ・アップも必要である。その際、学校図書館独自での実施が可能なものと、各教科と連携して行うものとの整理し、内容を明文化する必要がある。

さらに、全ての教科と図書館が協力して実施する情報教育カリキュラムの編成を目指したいものである。

（３）子ども同士の意見交換・討議

子どもたちはお互いの意見交換の中で触発され、発見することが多い。子どもたちが生で意見を戦わせる楽しさを発見する場面を、学校教育の中に設定することが大切である。

クラスでの討論やスピーチ、読書討論会 等と共に、調べ学習の中にも質問の時間や意見交換の場を設定する必要がある。

8. おわりに

今、コンピュータという、20世紀に誕生した新しいメディアをめぐって様々な角度から議論がされている。これからも進化を遂げていくであろう、この新しいツールをめぐって話題は尽きない。

しかしながら問題にすべきは、コンピュータのみならず、コンピュータも含むメディア全体をどう批判的にとらえ、どう活用していくか — メディア（情報）・リテラシーである。それを抜きにレポートも論文も成立しにくい時代になってしまった。

様々なメディアが発する個々の情報には不確かさが付きまとう。しかし不確かさを持つ個々の資料・情報が図書館コレクションに位置付けられ、図書館サービスと利用教育によって確かな資料・情報へと変化していく。メディア（情報）・リテラシーを学校図書館に位置付ける所以である。

注1 『教育実践と教師 その困難と希望』佐藤隆 他編（かもがわ出版 2013年）

注2 『学びから逃走する子どもたち』（岩波ブックレット）佐藤学著（岩波書店 2000年）『学校の挑戦』佐藤学著（小学館 2006年）『子どもの危機をどう見るか』（岩波新書）尾木直樹著（岩波書店 2000年）ほか

注3 『授業が変わる世界史教育法』鳥山孟郎著（青木書店 2009年）他

注4 『「ケータイ時代」を生きるきみへ』（岩波ジュニア新書）尾木直樹著（岩波書店 2009年）

注5 『メディア情報教育学』坂本 旬著（法政大学出版局 2014年）

注6 2014年12月20日付 毎日新聞9面 田中東子「メディア時評」